

琉球大学学術リポジトリ

沖縄返還交渉資料第4巻

メタデータ	言語: 出版者: 公開日: 2019-02-07 キーワード (Ja): 総理訪米, 米国人記者との会見, 総理, 愛知外相, ニューヨーク・タイムズ, 愛知外相・ロジャーズ長官会談, 統合局長・スナイダー会談, 記者会見, 外相, 官房長官, 米国下院歳出委員会対外活動分科委非公開聴聞会, スナイダー国務省日本部長 キーワード (En): 作成者: - メールアドレス: 所属:
URL	http://hdl.handle.net/20.500.12000/43630



事務次官	アメリカ局長	アジア局長
島大使	北米課長	審議官
官房長		北東アジア課長
高杉前南連所長に対する米琉球 民政府首席民政官オトリック准将 の感謝状に関する件		
(昭 34. 10. 13) 北東アジア課		
今般米琉球民政府首席民政官オトリック 准将は高杉前南連所長に対し別添の とおり感謝状を送付越した上で高貴に 供する。		

アジア局
34.10.13
局長附

号
兼 2228

外務省

UNITED STATES CIVIL ADMINISTRATION OF THE RYUKYU ISLANDS
Office of the Civil Administrator
APO 331

HCRI-10

October 3, 1959

Dear Mr. Takasugi:

Upon the termination of your tour of duty in the Ryukyus, I wish to take this opportunity to express, on behalf of the members of the United States Civil Administration, my sincere appreciation for the cooperation and services rendered by you in connection with Civil Administration activities. Officially, your actions were conducted with decorum, intelligence, and objectivity; socially, you have been most gracious and personable. This warm and sincere attitude has won you many friends among Ryukyuans and Americans alike. We will not soon forget you.

The United States Government and the Japanese Government have had a record of splendid relationships over the years. Your services here are another manifestation of your government's desire to further promote this close relationship. Our mutual interest in Far Eastern affairs, I am sure, will continue to further our common objectives in the international scene.

I thank you again for the outstanding services rendered by you in the Ryukyu Islands. Congratulations on your new assignment; may I wish you every success in your future undertakings.

Sincerely yours,

JOHN G. ONDRICK
Brigadier General, USA
Civil Administrator

Mr. Noboru Takasugi
Bldg No. 48-2, Kamitsuruma Kodan Jutaku
No. 5255-1, Kamitsuruma Cho
Sagamigahara City, Kanagawa Prefecture
Japan

ソカヒ 万博

大政要外務官
事務次長 典房
大臣官審審長 長
儀禮文会首 給
総人電厚計
参閣析企
参領旅移

中東
北西
米北
中南
西東

近ア
経経国万
参領統二
参政技二
国一理
参政経科
軍社専
参領内外
一一

2部 2114世

注意
1. 本電の取扱いは慎重を期せられたい。
2. 本電の主管変更その他については検閲班に連絡ありたい。

173

電信写

69年 11月 8日 16時 20分 米 国 発 米北
69年 11月 9日 06時 35分 本 省 着 米北
外務大臣 殿 吉野 大使 臨時代理大使 総領事 代理

オキナワ問題 (報道)

第3595号 平 至急

8日付当地各紙は、7日総理官にて行なわれた総理の米人記者との会見ぶりをかなりのスペースをさいて報道している。各紙ともオキナワ交渉、訪米についての総理の所信、経済問題等にしよう点をあてたとり上げ方をしているところ、要旨次のとおり。

ワシントン・ポスト (ハリソン特派員記事)
1面で、「総理は上院の動きについてゆう慮」と題し、総理は上院決議についての詳しい見解を承知していないが、長期にわたってなされてきた訪米への準備に悪影響を及ぼさないことを希望しているとして、今次訪米に政治生命をかけるとの所信を明らかにしたと報じている。さらに総理側近筋は、上院議決支持議員の中には南部せん維産業の利益を代表するものがあり、これらがせん維輸出規制をオキナワ返かんの条件とする様=クソン大統領に圧力を加えるのではないかとゆう慮しているが、然し右筋によれば、日本は結局せん維問題については譲歩する用意はあるが、オ

外務省

注意
1. 本電の取扱いは慎重を期せられたい。
2. 本電の主管変更その他については検閲班に連絡ありたい。

電信写

キナワとリンクさせられたということにはしたくないのであると述べている旨指摘し、総理も本日の会見でその様に考えている旨述べられたと報じている。核の問題を共同コミニケに如何に表現するか点について、総理は核撤去をはつきりと表現出来ればベターであるが、核の抑止力という点からこの点をあまりはつきりさせることはADVI S A B E Eではあるまいとの見解を明らかにしたと報じている。
2面=ニューヨークタイムズ (オカ・タカシ特派員記事)
「オキナワ返かんに政治生命をかける」と題し、2面トップにおいて返かん後のオキナワの軍事的役割についての総理の見解を中心に報じている。
即ち、訪米の目的は、オキナワ返かんがオキナワ米軍基地の機能を突発的に何ら損ねることにはならないということをも米国政府に身をもつて説明することであるとの総理の所信を報じ、さらに具体的には、返かんの時期と本土なみ返かんにつきはつきりした合意に達することである旨総理が述べられた旨指摘している。さらに返かん時期については、1972年までに返かんということであればW O R D E R F U I Eであると総理は付言された旨報じている。基地の態様については、総理は返かん後において現在と同様の態

-2-

外務省

注意

1. 本電の取扱いは慎重を期せられたい。
2. 本電の主管変更その他については検閲班に連絡ありたい。

電信写

様が与えられることを示さするような発言はいつさいされなかつたが、極東の安全保障については日本は米國に対し十分協力するものである。かりにヴァイエトナム戦争が返かん後も続いているとすれば、オキナワが現に果している軍事的役割を重大に弱める様なことはしないでであろうとの見解もひ歴していたと指摘している。

3. ボルチモア・サン（ペーパー特派員記事）

「総理は核武装、憲法改正に反対」と題し、総理が軍事予算増強の必要を認めつつも、核武装に関するド・モール見解には反対なること、憲法改正はすべきではないとの所信を述べられたことを報じている。オキナワ返かん交渉においては、少なくとも返かん時期をはつきりと決定したいが、それ以上については、本土なみ返かんが実現できればB
B T T B B であると総理は述べたと指摘している。核の抑止力の意味については総理は理解を示し、共同声明に核撤去がはつきり表現されていなくとも、これに対する政治的
難をのり越えることができようとの見解であつたと報じている。要するに総理としては日本はオキナワの現在果している軍事的役割を大きく損う様なことはしないと米側に説明することにより、米軍の活動に対する日本の協力をA B
B U B B することを示さしたものであろうと論じている。

(7)

在外に於ける一般情報の送付の由、
（昭、四四六一九）
（昭、四四六一九）
（昭、四四六一九）

注意

午後八時十五分以後使用のこと

（昭、四四六一九）

外人記者クラブ招待晩さん会における
佐藤総理演説

ハルツエンブツンユ会長並びに御列席の各位

本日はお招きにあづかり有難うございました。日夜世界各地へわが国の真の姿を報道しようと努めておられる本クラブの会員各位に折にふれて所感を述べる機会を与えられますことはまことに欣快とするところであります。従来私がこのクラブでとりあげたのは、主としてわが国内外の情勢と、これに対する私の取り組み方といったテーマでありました。本日は、多数の外国使臣も見えておられますので、特に「社会変革による不均衡とその克服」というテーマのもとに若干所感を述べてみたいと思っております。

最近わが国において、「ピーター・ドラツカー氏の「断絶の時代」という本がベスト・セラーになりました。私も一読の機会を得たの

であります。確かに現代は「断絶」という極端な表現をしてもおかしくない程、過去との間につながりの少ない面があります。このような現象は世界先進国に共通であるとはいえ、日本のような特殊な風土のもとにおいては、断絶の度合はとくに深いのであります。

これは、現在日本が直面している大きな課題、即ち国の安全保障とか大学問題とかのすべての根底に流れている重要な要素であり、一九七〇年代の日本は、内政にせよ外交にせよ、この非連続性の克服によつてのみ真に健全な発展を行おうと考えられるのであります。

最近我々日本人には、まことに耳に快い賛辞が方々から寄せられます。曰く、日本の戦後の業績は~~顕~~蹟である。曰く、日本は経済的巨人の列に伍した等々の賛辞であります。ハーマン・カイン氏の「二十一世紀は日本の世紀である」という予言は、国民に対して日本の未来図を描き、そして日本の責任を訴えるに際して私自身も愛用さ

アメリカ局長
参事
北米第一課長

せて貫つてゐる言葉であります。事実最近発表された経済企画庁の集計によれば、一九六八暦年の日本の国民総生産は一、四一九億ドルに達し、自由世界才二位、一人当りの所得も一、一〇〇ドルでイタリアを凌駕したと推定されています。

また、先日東名高速道路も全通し、東海道新幹線と並ぶ日本経済の今一段の飛躍のためのもう一つの大動脈がここに完成しました。巷にはビルや工場、地下鉄などの建設工事が各所にめまぐるしく進められ、自動車の普及はいかなる予想をも上回る急ピッチで進行しており、加えて民衆の家庭生活の向上も著しいものがあります。かかる物質的繁栄のみならず、高等教育の普及、情報量の増大、都市への人口集中など、日本は近代的社会の特色をあますところなく備えるに至つております。分野によつては、近代化とか近代性とかいつた呼称はすでに時代遅れとすら言うことができ、日本は部分的にはいわゆる「ポスト・インダストリアル・ソサィアティ」へ一歩

踏み入れているとすらいうことができよう。

しかし、仔細に観察してみれば、交通の著しい渋滞、公害の激増などの現象は急速に深刻の度を加えており、また消費生活の華やかさと対照的に住宅の不備など経済社会の発展の不均衡が目につきます。そして、かかる歪みは、単に現象面に現われているのみならず、わが国民一人一人の深層心理にも及んでいるかに見うけられます。

一言にしていえば、物質的發展、科学技術の進歩のためにいわゆる人間疎外の現象が起つてゐる訳であります。現在最も大きい社会問題になつてゐる大学問題の原因についても、種々の角度からの分析が可能です。ありますが、最も重要な要素はこのような高度工業社会に対する個人の適応の問題があるのではないのでしょうか。

青年はいずれの時代でも自我の確立を欲し、周囲の社会体制に反発してきました。しかも、わが国の場合には、戦争及び敗戦という動乱の時期を経たことと、他のいずれの国よりも社会変革のテンポが

観

速かだつたことの結果、世代間の意識の断絶が特別に大きいのであります。こうした背景で育つてきた青年、そして既成の倫理観、価値感を認めない青年達は、個人の生き方を制約するものとして現体制に反発し、しかも他面個人に優先する価値観を見出したという欲求をもちながら代案もなのまま、一部分子の煽動により最も非民主的な手段たる暴力に訴えている、これが現在の大学紛争の本質であると思ひます。

要するに、日本は一面において著しい近代化を達成しながら、物質的にも、精神的にもこの近代化に即応しえない問題をかかえているということがあります。ここに日本の「断絶」があるわけであり

ます。日本の二重構造ということとはよくいわれて来ましたが、過去においては、この二重性とは、近代的な重化学工業の傍らに、極めて生産性の低い中小企業や農業が併存しているという事実や、民

主主義的教育を受け世界の最先端を行く科学技術を駆使しながら、日本人一人一人が、なおかつ西欧人と較べて非合理的な行動をとつたり、場合によつては封建的とも呼びうるような精神構造を温存していることを指していました。

しかし、今日の日本は、すでにこのような二重性を一歩超えた課題に直面しています。

勿論程度の差こそあれすべての先進工業国に類似の現象が起つております。しかし、私には欧米諸国はこの現象をはるかに巧みに処理する能力をもつている。換言すれば欧米諸国では社会的な変革にかかわらず人間性の保全や回復が、より賢明に行なわれているという風に見うけられます。ここに西欧文化の一つの強靱性があるのであります。

明治百年、わが国は多くのものを西欧から学んできました。ある分野については、すでに、西欧に追いつき、あるいは追い越した面

観

も少なくありません。しかしその学び方は、戦前にあつては富国強兵、戦後にあつては生産力の回復を主たる目標として行なわれ、必ずしも日本の古い伝統や価値感に基づく自信をもつた学び方とはいえませんでした。そのため、産業や消費生活水準で近代化が進んだ今日、かえつてそれに伴つてくる現象に対処する姿勢がぐらついている面があります。このような問題に対する取組み方こそ、これからわが国が西欧を範とすべき点であります。

わが国は、二十四年前、一時的ではあります。が当時保有していた物質的価値も精神的価値もすべて失つてしまいました。その廃墟から今日の繁栄を築き上げたものは、やはり日本民族の若さであり、能力でありました。今日までこの資質が主として生産力の再建に向けられたとすれば、私は一九七〇年代においては、この資質が私のいう断絶の克服に向けられるべきであると思つております。

この断絶の克服は、単に個人の不満の解消、社会的不均衡の是正と

いつた目標に向つての政策のみによつて実現するものではありません。より広く、日本民族のエネルギーを昇華し、自国の経済建設の次元を越えた高い目標に結集することが必要であります。巨大な核戦力が世界をおおつている中であつて、このような目標を見出すことは容易ではありません。単に自国の安全のみをこととする消極的平和主義のみでは、もはや国民は満足しないことは明らかであります。しかし他方現代社会における個人のあり方と調和しないような国家目標をかゝけることもまた誤りであります。新しい時代の特性をふまえずとも、価値ある創造を行いたいという人間の本来的要求を満たすような目標でなければならぬと思つております。私は、日本の場合には、日本民族の創造力を人類の福祉、就中、アジアの平和と安定のために発揮するということこそかかる目標として最もふさわしいものであり、国民のエネルギーをこの方向へ導くことが一九七〇年代の日本の政治の最大の課題であると考えるのであります。日本が外に対しては限られた

防衛力しか持たない国でありながら、経済力ならびに一億の国民の
高い知的水準と良識とによつてかかる目標を実現しつゝ国際社会に
おける安定勢力になり、内にあつては独自の思想、文化の創造を行
なつてゆく国になれば、初めて日本は名実ともに世界の一流国と呼
ぶに値する国となるものと考えております。

日本国民が新しい目標を模索していることは、すでに自主性、独
自性をもつ外交政策への要求が国民各層に澎湃として高まりつつあ
ることにも見られます。例えば、先日川奈におけるA S P A C 会議
でも見られたアジア諸国の地域的連帯感の高まりに応じ、日本がア
ジアの国としての責任を果たすこと、就中、アジアの経済開発のため
に日本の知力、財力、生産力をふりむけることがこれでありま
す。又、日本の軍縮委員会参加を実現し、世界の期待にこたえて、軍縮の
分野において国力と国柄にふさわしい貢献を行なうこともこれであ
ります。

安全保障政策、即ち日米安保条約についての態度、あるいは自主
防衛力の整備、さらにはより広く核に関する政策も、先に申し述べ
ましたような課題の克服、そして国民の自主性への指向と切り離し
て考えることはできません。幸いにして、こゝ二、三年安全保障に
ついでに国内の論議は著しく現実性を帯び、実証性を尊ぶようにな
つてきました。日本のおかれている国際的地位なり日本の国力なり
を前提とした政府の安全保障政策についての考え方は、徐々々国民
各層に深く浸透しつつあるように思われます。

いうまでもなく、七〇年代を前にして、まず取り組むべき課題は
沖縄返還であります。先年私は、沖縄問題の解決なくして戦後は終
らないということを述べたことがあります。しかし私は、沖縄返還
の実現は、単に戦後という一時代の終焉のみではなく、日本国民が
自らの真の姿を確認し、進んで世界の中に日本にふさわしい地位を
見出すための一つのきつかけとなるべきものと考えるのであります。

御静聴ありがとうございました。

Address by Prime Minister Eisaku Sato
before the Foreign Correspondants Club

June 19, 1969

Mr. President, Excellencies, Ladies and Gentlemen:

It gives me great pleasure to be here with you tonight and to have this opportunity, as I have on past occasions, of speaking to members of this Club who are daily engaged in the task of reporting to the world the image of Japan today.

In the past, I have spoken here mainly on Japan's domestic and international problems and the manner in which I proposed to deal with them. Tonight, however, I wish to change my approach and speak on the problem of disequilibrium stemming from social change and ways to overcome it.

Recently, the book entitled "The Age of Discontinuity" by Peter [Drucker] has become a best seller in Japan. I have had occasion to read this book and feel that, in our present age, where rapport with the past is so small, the use of the drastic expression "discontinuity" is not inappropriate. While this phenomenon is common to the advanced countries of the world, in a country like Japan,
with

- 2 -

with its unique character, it is all the more acute. This is an important element that flows beneath the major problems with which Japan is presently confronted, that is, the question of national security and the university problem. In my opinion, if Japan is to develop in a truly sound direction in the 1970's, be it in her domestic policies or her foreign relations, we must overcome this non-continuity.

Of late, we Japanese have often heard pleasing words of praise, such as "the miracle of Japan's postwar achievements," or, "Japan ranks among the economic giants of the world." The forecast of Dr. Herman Kahn that "the 21st Century will be Japan's century" has drawn a picture of Japan's future for the Japanese people. It is an expression I have often cited in appealing to the people for a sense of national responsibility.

According to recent statistics published by the Economic Planning Agency, Japan's Gross National Product for 1968 amounted to \$141.9 billion which ranks second in the Free World, while per capita income of \$1,110 is estimated to have surpassed that of Italy.

Furthermore, with the opening of the Tomei Expressway a few weeks ago, another major artery, of equal importance with the New Tokaido Line, has been completed for the further
enhancement

enhancement of Japan's economic growth. On the urban scene, there is a bewildering profusion of construction of buildings, factories and subways; the popularization of automobiles is proceeding at a rate that exceeds all predictions, while there has been a remarkable improvement in family living conditions. In addition to this material well-being, Japan has come to acquire all the characteristics of a modern society with the dissemination of higher education, increased volume of information and the urban concentration of the population. In certain fields, ~~the~~ terms such as "modernization" and "modernity" appear already to be outdated. We can even say, in limited areas, that Japan has already taken her first step into the so-called "post-industrial society."

However, a closer look reveals that social conditions, such as acute traffic confusion and increased public hazards, are fast deteriorating, while there is a conspicuous disequilibrium in economic and social development as seen in the housing shortage which stands in direct contrast to the glamor of the consumption boom. These strains are apparent not only as physical phenomena, but seem to have reached into the very heart and mind of each and every individual. In other words, we are witnessing the phenomenon of so-called "dehumanization" as the price for material development and scientific and technological progress. The causes of the university dispute, which is currently the biggest social

problem

problem in this country, can be analyzed from various angles but the most important factor here is the difficulty that the individual encounters in adapting himself to this highly industrialized society.

In any age, youth has always sought to establish its identity and has challenged the established social system. In the case of Japan, the fact that she has gone through a period of upheaval resulting from war and defeat and the fact that the tempo of social change has been faster perhaps than in any other country have caused a particularly large generation gap. Brought up against such a background, the young people refuse to accept the existing ethical attitudes and values and challenge the existing order which they consider to be obstructive to the process of individual expression.

Moreover, although imbued with the desire to discover values that supersede the individual, they have, while still without any alternative program, allowed themselves to be incited by a small minority into taking the most undemocratic course of resorting to violence. This then, as I see it, is the essential nature of the current university dispute.

In short, while Japan has succeeded in achieving modernization to a remarkable degree, she is nevertheless beset with problems that cannot be reconciled to modernization either in the material or the spiritual sense. It is here that we perceive "discontinuity" in Japan.

Reference

Reference is often made to the "dual structure" of Japan. In the past, however, this has meant the existence of heavy and chemical industries side by side with such low productivity sectors as medium and small-sized enterprises and agriculture. This has also meant that the Japanese people, with their democratic education, while utilizing the most advanced technology, have acted in a manner that is irrational by Western standards and in certain cases have retained a spiritual structure that could be called feudalistic.

The Japan of today, however, appears to be facing a problem that goes beyond this "dual structure." To be sure, a similar phenomenon is now occurring in all advanced countries in varying degrees. However, I consider that the Western countries have the ability to deal with this phenomenon in a much more effective manner. In other words, it would appear that in the West, human values are being wisely preserved and strengthened, notwithstanding social change. It is here that one can perceive the resilience of Western culture.

In the hundred years since the Meiji Restoration, we have learned much from the West. In certain fields, Japan has today equalled the West and, in certain cases, even surpassed it. However, in the process of learning, we sought only

only to strengthen our national wealth and military power, before the war, and to regain our productive power, in the postwar years, without reference to our ancient traditions and values, in the absence of which we lacked confidence in what we were undertaking. For this reason, today with the great advances in industrialization and consumer living in Japan, our approach to the phenomena arising from modernization is lacking a firm foundation. I feel we have a great deal more to learn from the West in dealing with such problems as these.

Twenty-four years ago, Japan suffered a temporary loss of all her material and spiritual values. That she was able to rebuild upon the ashes of war the prosperity she enjoys today bespeaks of the youthful vitality and capacity of the Japanese people. Assuming that these assets were directed mainly toward the rebuilding of our productive capacity until today, then I consider that, in the 1970's, these same assets should be directed to overcoming the "discontinuity" that I have cited.

The task of overcoming this discontinuity cannot be accomplished by policies directed only to eliminating the discontent of the individual and correcting social disequilibrium. Our national energies must be enhanced and channeled toward higher

higher targets that transcend the preoccupation with economic construction at home. In a world living under the shadow of a colossal nuclear war potential, this is by no means an easy task. Clearly, the Japanese people will no longer be satisfied with a negative pacifism which concerns itself only with our own national security. Nevertheless, it would be wrong to draw up national targets that are not in harmony with the ideals and aspirations of the individual living in our modern society. These targets, while taking into consideration the special nature of the new age, must satisfy the innate human desire to create something meaningful and worthwhile.

In the case of Japan, I consider that the most worthy target we can set for ourselves would be to direct the creative capacity of the Japanese people to man's welfare and particularly to the peace and stability of Asia. The greatest political task for Japan in the 1970's is to channel the energy of the Japanese people in this direction. Externally, if Japan were to become, despite her limited defense capacity, a stabilizing force in the international community through economic cooperation and the high intellectual standards and the common sense of 100 million Japanese,

and

and if, internally, she were to become a country creative in the field of thought and culture, it is only then that Japan can be considered worthy of being called a first-class nation.

That the Japanese people are seeking a new national objective is evidenced by the rising demand from all quarters for greater initiative and originality in foreign policy. For example, Japan is endeavoring to fulfill her responsibilities as an Asian nation by responding to the emerging trend toward regional solidarity among Asian countries, as evident in the recent ministerial meeting of ASPAC at Kawana, through directing her intellectual, financial and productive capacities to Asian economic development. Secondly, by participating in the Disarmament Committee in Geneva, Japan will play a role in the field of disarmament commensurate with her national strength and character.

In considering our attitude toward national security, that is, the Japan-U.S. Security Treaty, or the consolidation of our self-defense capacity, as well as, on a broader level, a nuclear policy, we must not overlook both the need to overcome the problems that I have mentioned earlier, as well as the trend of the nation toward a more independent foreign policy.

policy. Fortunately, in the last two or three years, debate within the nation on the question of security has come to assume a more realistic and objective character. The government's thinking on security policy, based upon Japan's international position and her national strength, is gradually coming to be understood among the people in general.

Needless to say, as we stand on the threshold of the 1970's, the first issue that we have to deal with is the return of Okinawa. Some years ago I stated that without a settlement to the Okinawa problem, Japan's postwar period could not be considered closed. However, I consider the return of Okinawa not merely the end of an era known as the "postwar" but a turning point that will enable the Japanese people to reaffirm their identity and to seek a proper place for Japan in the world.

Thank you very much.